



医療の場と子どもを育てる環境が 一体となり、みんなの未来をつくる。



重症心身障がい児の大きなバギーが介助者と共に入っても余裕のある、十分な広さを確保した外来の多機能トイレ。きれいな黄色がアクセントになった明るい空間である。

1983年以来、埼玉県唯一の小児専門病院として、地域と連携しながら子どもたちに医療を提供してきた、埼玉県立小児医療センター。以前の岩槻区の建物が老朽化し、耐震化が必要と判断されたこともあり、さいたま新都心に免震構造の病院を新築・移転し、2016年12月27日にオープンしました。ここでは、埼玉県立けやき特別支援学校も同じ建物の7Fに併設され、療養だけではなく、子どもたちの生育も考えられた環境が整備されています。



建物は13階建ての免震構造。右に隣接しているのが、さいたま赤十字病院。

周産期医療を一貫して行える新しい場所には 楽しいロボットたちのホスピタルアートも。

小児医療センターの移転とほぼ同時期に、産婦人科や救急医療など総合的な医療機能を持つ「さいたま赤十字病院」も、隣接した敷地に移転オープンしました。2つの病院が渡り廊下でつながったことで連携が強化され、以前は生まれたばかりの命が救急車に揺られながら搬送されるしかなかったケースも解消。妊娠から出産後までの周産期医療を一貫して行う、産科と新生児科の機能を併せ持つ「総合周産期母子医療センター」も新たに開設されました。「小児救命救急センター」も開設され、小児がん拠点病院としての機能も向上しています。

ここでは、入院や通院の子どもたちが安心して楽しく過ごせるように、ホスピタルアートが充実。院内各所には、病院オリジナルの8つの友だちロボットのキャラクターが隠れているため、探して遊ぶことができます。また、サインは数字が読めない子どもにもわかるように、色や形でも表現されています。



明るく柔らかみのある雰囲気の2Fラウンジ。

埼玉県立小児医療センター

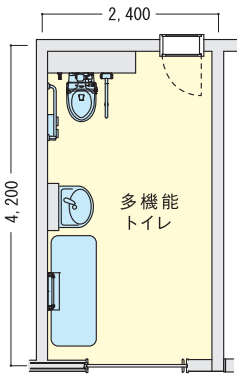
- 竣工年月 / 2016年8月
- 所在地 / 埼玉県さいたま市中央区新都心1-2
- 施主 / 埼玉県
- 設計 / 株式会社久米設計
- 延床面積 / 65,447.69m²
- 病床数 / 316床



2Fエントランスロビーにある、新病院を生命力あふれる大きな樹木に見立てた「カリヨンの樹」のアートワーク。ラッパやドラム、チューンなど、8つの楽器をかたどったロボットたちが、樹と共に生きている。



植栽にあふれる明るい吹き抜け空間。ここにもロボットがいて、子どもたちを応援している。



外来の多機能トイレ



外来の男性用トイレの小便器は、清掃のしやすい壁掛けタイプ。



外来の女性用トイレには、誰にでも使いやすいように高さの異なる手洗器を設置。

どんな子どもの状態にも対応できる 広さを確保した多機能トイレなどを用意。

外来の多機能トイレは、ストレッチャー並みの大きさのある重症心身障がい児専用のバギーが、介助者と入っても余裕のある広いスペースを確保。利用頻度の高い、おむつ交換台も備えられています。

病棟は乳幼児の割合は多いものの、約半数の子どもがトイレを使っています。病棟のトイレは自宅に戻った時のことを考えて、家と同じようなタイプを採用。障がいがあってもどのようにしたらトイレを使えるかを考えて、訓練できるように配慮しています。また、空調無菌病棟を設置するとともに、小児特有の感染症疾患に対応するため、陰圧管理が可能な個室を18床用意しています。



外来の女性用トイレのブース。便器は清掃のしやすい壁掛けタイプ。



壁の各所には楽しい絵が描かれ、子どもたちの心を和らげている。



11F乳幼児病棟の個室。すべての病室から外の景色を眺められる。



11Fの浴室に設けられた、乳幼児のための2槽式で使いやすい幼児用バス。

Voice 病院長さんからの声

みんなで安全な環境づくりに取り組んでいます。



埼玉県立小児医療センター
病院長
小川潔さん

医療の場は入院すると生活の場になるため、子どもたちが快適に暮らせるように明るい空間を創造しました。窓の外には植栽の緑があり、心を和ませます。さらに大切にしたのは、安全な環境づくりです。子どもは想定外の行動もするため、出っ張り、指を挟むところ、段差を飛び降りるところなど、危険のある箇所には常に注意しながら改善を実施。看護部を中心に多くの人の目で確認を行い、みんなで気をつけながら事故対策を行っています。



小児医療センターに勤務するスタッフの子どものために設けられた院内保育園「かりよん保育園」の子どもトイレ。幼児用の便器が備えられている。

Voice 埼玉県病院局の方からの声

11km先への移転を無事に成し遂げられました。

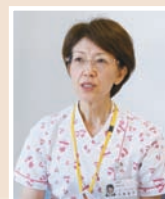


埼玉県 病院局
経営管理課 主幹
吉野伸明さん

すぐ隣にはさいたま赤十字病院があり、例えばご家族で交通事故に遭われた時に、大人と子どもがまったく別々の場所に搬送されるケースが解消されるなど、利点は多いと感じます。11km離れた病院への移転では慎重なシミュレーションやリハーサルを重ね、病院機能を止めることなく無事に移転することができました。

Voice 看護部長さんからの声

ロボットたちを探し歩いている子どももいます。



埼玉県立小児医療センター
看護部長
久保良子さん

以前の病院では6床室や8床室もありましたが、新病院では感染対策なども考えて、個室の数を増やし、大部屋でも4床室までになっています。診察や検査の前にリラックスして遊びながら待ってもらえるように、外来には多目的の広場を設置。各階に隠れているロボットたちを楽しく探し歩いている子どもたちもいます。

Voice 感染管理認定看護師さんからの声

CDCの基準に沿った陰圧室を設けています。



埼玉県立小児医療センター
感染管理認定看護師
立花亜紀子さん

空気感染隔離室を各病棟に2床ずつと、感染症治療を中心とする病棟にプラス4床、全部で18室設けています。切り替えて陰圧になりますが、ただ陰圧にするだけではなく、アメリカのCDCのガイドラインに沿って空気圧の圧差2.5パスカルの維持を可能にしました。18床以外にも陰圧にできる場所があります。

Voice 設計担当の方からの声

子どもを育む大きな木のような環境をデザイン。



株式会社久米設計
設計本部 医療福祉設計部 主管
小倉基延さん

病気の治療だけではなく、子どもの生育環境づくりに努めました。そこで、病院と特別支援学校の合築を行いました。病院の真ん中に体育館とプールがあるなんて日本初でしょう。病棟は家のようなもので、上下の動きによって、まるで大きな木の中で刺激を受けながら暮らすような日常生活をデザインしました。

埼玉県立けやき特別支援学校

子どもたちが入院前と変わらず、退院後も安心できるような学びの環境を整えてサポート。

けやき特別支援学校の本校は7Fにあり、40名ほどが在籍。小児医療センターに入院している小児がんや心臓病、腎臓病、交通事故や骨・関節の病気などの小・中学生が学んでいます。学年ごとの教室があり、1クラス数名で、一般の小・中学校と同じ教科書を使って学習。一人ひとりの体調や治療に合わせて学習が進められ、学校に登校して6時間の授業を受けることが可能です。注射などの治療が必要な場合でも短時間で済むことが多いため、エレベーターで学校と病棟との間を効率よく行き来することが可能。昼食時も病棟に戻ります。体調が悪い時には、教員が病室に向いてベッドサイドでの学習を行うことができます。

同じ7Fフロアの中には体育館やプールもあり、文化祭や修学旅行などの学校行事も実施。児童や生徒たちが、入院前と変わらない学校生活を送れるように、また退院後に学校へスムーズに復帰できるようにサポートしています。

医療の進歩に伴って、学校教育も変化してきました。平均入院期間は、けやき特別支援学校の場合、およそ5か月。地元の学校に戻って通院しながら治療するケースも増えてきました。そのため、今後ますます地元の学校でも、子ども一人ひとりへの医療に対する合理的配慮が欠かせません。もちろん、安全で使いやすいトイレも必要。子どもたちにとって特別な、かけがえのない時間を大切にする取り組みが求められています。



3年生の教室。こうした教室のほかに、理科室や家庭科室、音楽室なども用意されている。



多機能トイレには、オストメイトの子どものための設備も備えられている。

Voice 校長先生からの声

毎朝病状をチェックして情報を共有しています。

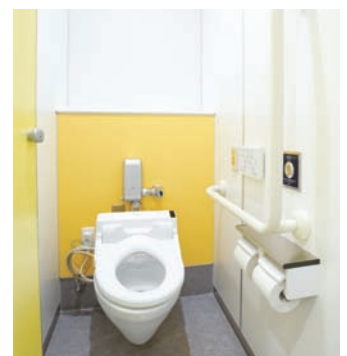


埼玉県立けやき特別支援学校
校長
細谷忠司さん

毎朝、登校前に学校スタッフが病棟をまわって、すべての子どもの今日の病状を確認するなど、医療と確実に連携し情報共有しています。埼玉県で年間30日以上、病気で学校を欠席している児童・生徒は約3千人もいます。子どもたちの学びに空白を作らない病弱教育を、これからさらに充実させなければなりません。



立体的でわかりやすいトイレのサイン。



L型手すりのある女子児童用トイレのブース。



蓄尿が必要な子どものために、トイレには蓄尿容器を置く棚を用意。



体育館では、子どもたちに合わせて活動内容を工夫するなど、柔軟にメニューを変更しながら体育の授業が行われている。